

## 西欧ムスリム移民二世の卒業小中学校における生徒の出自別構成と 食行動の「再イスラーム化」

早稲田大学 小島 宏

### 1. はじめに

移民の社会統合指標の一つとしてのハラール食品消費行動の関連要因を分析してきたが、(小島 2013, 2015, 2016) では東アジアのムスリム移民調査個票にロジット分析を適用し、ハラール食品消費行動に対して兄弟姉妹構成の影響があることを見いだした。他方、Rodier (2014) の表はフランスで前期中等教育在学中の次子以下には多様化の一類型「抗議者」のハラール食品消費行動をとる傾向があることを示した。Kepele (2011) のムスリム保護者への学校食堂利用に関する調査結果も多様化の影響を示す。そこで、西欧のムスリム移民二世における食行動多様化(「再イスラーム化」を含む)の関連要因について TIES (The Integration of European Second generation) 調査ベルギー版の個票の予備的分析を行ったところ、兄弟姉妹構成の影響だけでなく、在籍した小中学校の生徒の出自別構成の逆方向と思われるような影響が見いだされた。教育達成への生徒の出自別構成の影響は分析されているが、小中学校の構成の影響が異なるという結果はないようなので分析を試みることにした。

### 2. 方法

本報告ではデータとして TIES (2005~2007 年) 調査ドイツ版、オランダ版、ベルギー版、フランス Te0 (Trajectoires et Origines, 2008 年、35 歳未満に限定) 調査、ベルギー-MHSM (Migration History and Social Mobility, 1994~1996 年、男性のみ対象、35 歳未満に限定) 調査の個票を用いる。西欧のムスリム移民二世における卒業小中学校の生徒の出自別構成(移民出自が半数以上)、2つの交差項、それぞれとコーラン教室通学との交差項のハラール食品消費頻度とラマダン月の断食頻度(Te0 調査については宗教的食事制限、MHSM 調査についてはラマダン月の断食頻度)に対する影響を明らかにするため、各種の人口学的、民族的、社会経済的、幼少期宗教的属性の影響を統制した比較可能なモデルでロジット分析を行った結果を示す。

### 3. 結果

2項ロジット分析を用いて各調査の個票データによる比較分析結果によれば、ベルギーとオランダでは卒業した小学校の生徒のうちで移民出自の者が多数派の場合に宗教的な食行動が抑制され傾向があり、卒業した中学校で生徒のうちで移民出自の者が多数派の場合に宗教的な食行動が促進される傾向があるが、それらの効果は必ずしも有意でない。また、フランス Te0 では後者の場合、同様な傾向がみられる。しかし、ドイツとベルギー-MHSM (男性) ではベルギーやオランダと逆の傾向がみられる。両者の交差項、それぞれとコーラン教室通学との交差項も有意になる場合も多いが、それらの効果は性別、国、従属変数により異なる。

### 4. おわりに

報告の際には交差項も含めた分析結果を提示し、詳細に論じる。

### 謝辞

本研究は早稲田大学からの特別研究期間中(2015~2016 年、ゲント大学)に科学研究費補助金基盤研究(B) (15H03417) 「ムスリム・マイノリティのハラール食品消費行動の関連要因：東アジアと西欧の比較研究」(研究代表者：小島宏)の一環としてなされたものである。西欧各国の個票データ作成機関等・提供機関等(紙幅の都合で詳細は報告資料に掲載)に深甚な謝意を表す次第である。

### 文献

小島宏 (2013) 「日本・韓国・台湾のムスリム移動者におけるハラール食品消費行動の関連要因」『早稲田社会科学総合研究』, 第14巻, 第1号, pp. 1-22.